

教科教育法の内容構成について

家政教育・金子 省子

1. 授業科目について

家庭科教育法の授業科目構成は、2回生前期の家庭科教育法Ⅰを教科教育の教員が担当した後、2回生後期にⅡを教科専門の教員が担当して食物及び被服領域を中心とした内容で行ってきた。その後附属教育実習前の3回生前期に、教育法Ⅲを教科教育の教員が担当し、附属実習後の3回生後期に教育法Ⅳを位置づけてきた。

教育法Ⅳは前半保育領域を金子が担当した後、後半は田中教員が担当している。

ここでは、家庭科教育法Ⅳの前半部分（保育領域）についての授業報告を行う。

2. 授業の目的・目標・内容構成

家庭科教育法Ⅳの保育領域部分では、保育に関する学習の重要性と方法についての理解を深め、家庭科指導における実践的な力を養うことを目的としている。保育学習の重要性と今日的課題について述べることができ、保育領域の指導内容・方法・評価について考察して発表できることを目標としている。

本年度の内容構成は、以下のようであった。本年度は生活環境コースの免許取得希望者の増加により、受講生が大幅に増加した（16名）ことから演習回を増やし調整した。

- ①教育実習を終えて／公立校実習に向けて
- ②保育環境と家庭科保育学習の課題
- ③家庭科保育学習の課題（内容・方法・評価）
- ④家庭科保育学習の方法に関する課題（ロールプレイング）
- ⑤演習（中・高の内容構成）
- ⑥演習（保育体験・地域連携実習）
- ⑦演習（ロールプレイング）
- ⑧演習（評価）

初回は、学校教育教員養成課程の学生が教育実習での体験について発表し、生活環境コースの学生は、質問や今後の実習に向けての疑問などを発表した。さらに、後日これらについて文書でも提出させ、後半担当の教科教育の教員と共有し授業

に生かすこととした。

講義を行ったのち、特に保育領域の方法上の課題の1つである体験的学習のなかから、ロールプレイングを取り上げ、演習につなげた。

演習部分では、講義で指摘した課題に関連する授業実践例及び生徒の実態に関する調査研究などの資料に基づき、受講生が発表者の役割を担い演習を行った。資料の選択とグルーピングは教員が行い、授業時間外に学生と相談して分担方法などを決定した。

ロールプレイングの担当チームについては、自分たちで場面を組み、実際に発表回で行った結果をもとに、次の回にまとめを発表することとした。

3. 授業後のアンケートから

アンケートでは10項目について、5段階評定（a：強くそう思う b：ややそう思う c：どちらとも言えない d：あまりそう思わない e：全くそう思わない）で回答を求めた。また、良かった点と改善すべき点を自由記述で求めた。

(1)出席状況については、aが10名、bが3名で全体的に良好だった。

(2)シラバスの提示と予定の伝達についてaが10名、bが4名で、適切に示されたとの回答だった。

(3)内容構成の明確さについては、aが9名、bが4名、cが1名で、内容構成を十分理解できていない学生が皆無ではなかった。

(4)講義と演習のバランスについては、aが12名、bとcが各1名で、授業形態についての受け止めは良好であった。

(5)学生が捉える履修時期の適切さについて尋ねた。aが7名、bが4名で肯定的であるものの、cが3名おり、意見が分かれた。開講時期については、予想に反して、生活環境コースの学生の一部に半期前倒しの3回生前期がよいという回答がみられた。就職活動の早まりもあり、公立校実習を控え、もう半期前の履修の方が良いという捉え方があるのかもしれない。

(6)演習への教員のサポートの適切さについては、

a が 7 名、b が 7 名だった。改修工事のため、打ち合わせ等に不安があったが、この点是对応できたのではないかと考える。

(7) 演習への取り組み・準備については、a が 7 名、b が 5 名、c が 2 名で意欲的に取り組めたという学生が多いが一部に中間的な回答があった。

(8) 演習への参加状況（積極的に意見を述べたか）については、a は 3 名と少なく、b が 7 名、c と d がそれぞれ 2 名だった。自身の発表には積極的だが、ディスカッションについてはやや消極的な傾向で、これには、時間的制約のため十分に意見を出せず、記述したものを提出する回があったことも反映されていると考える。

(9) 「保育領域の指導にかかわる学習内容」が学べたかという点では、a が 6 名、b が 7 名、c が 1 名だった。

(10) 「意欲をもって学びたい課題の成立」については、a が 3 名、b が 8 名いるものの、「どちらともいえない」という学生が 3 名いた。公立校の教育実習を控える学生が多いが 4 回生時の授業はあまり受講しない現状も含め、この時期の教科教育法にかかわる学習課題の成立について、その質的検討が必要だと考える。

自由記述の「良かった点」では、教育実習後の学生から、「実際の授業をイメージし、教師の視点で考えられた。実習を振り返りながら学べた。」という意見があった。また、今後実習にいく学生からは「授業展開から評価まで考えることができた。」「教材や参考文献の紹介がたくさんあり、これからの参考になる。」「家庭科という科目をどのように授業するかを知り、知識が広がった。実習にいく前の自分の糧にしたい。」といった意見がみられた。

全体を通しての意見では、「前半で保育学習の現状と課題を学び、後半で実践事例を交えて学べて良かった。また、実習にいった人の話を聞いたり、保育学習の難しさを知り、実習に向けての心構えができた。」などがみられた。

演習については、テーマとグループをこちらで指定したことで、「今まで話したことがない人とも話せた」「自分が今まで選んだことのない内容を学べた」という意見がみられた。多数の資料と幅広い内容を学べたという意見が多数みられた。

一方で、「改善すべき点」としては、「演習の時間を増やして欲しい」「意見交換の時間がもっと欲しい」「ロールプレイがもっとしたかった」など、時間的な制約のなかで、もっと学びたかった点が指摘されていた。特にディスカッションの時間の不足はアンケートの回答結果と同様である。

「支援案を書きたかった」のように教育実習に直結する内容を求める意見もみられた。

4. 授業後の振り返りレポートから

本授業の目標である保育領域に関する実践的な学習については、先の自由記述に加え、ここでも教師の視点の意識化に関連する記述を捉えることができる。

例えば、「授業全体を通して教師自身がねらいや思いをしっかりともらないと生徒には伝わらないこと、その思いやねらいを達成させるためにはいろいろな題材や身近なものにアンテナをめぐらせておくことが教師にとって必要であると学んだ。」あるいは、「より教師に近い視点を学べた。それは評価について学ぶことができたからである。」などと述べられている。

また、討論の時間が十分とれず、時間的制約があったものの、発表に基づく演習の効果を以下のように捉えている学生もいる。

「グループで家庭科の授業についての発表を行ったことで、授業構成について視野が広がったこともあるが、私も生徒の前で、生徒に伝えたいと思う授業をしたい感情が芽生えた。不安の感情が一気に気合いへと移り変わった瞬間だった。」

5. 考察及び今後の課題

本年度は、グループごとにテーマを設定し 1 つのテーマに多数の資料を位置づけたことや実習を控えた学生が多かったことから、教壇に立つことに向けての意識づけをはじめ学習成果の評価が全体的に高い結果となったと考えている。

この授業開始後、家庭科教育法 I ～IV の担当及び内容構成に関しての変更が認められ、次年度の移行期を経て、22 年度からは保育領域は衣・食の領域と共に 2 回生の教育法 II での履修とすることとなった。これにより、懸案だった附属中実習前の履修が保障されるものの、時間数としてはより圧縮されることから、移行期に同時に分担する II と IV の内容と実施上の工夫もふまえ、更に検討を重ねたい。

特に、次の三点が挙げられる。①家庭科教育法 I から IV へと学生の受講動向の把握を適切な時期に行い、教員間で情報を共有すること。②各領域の教員が担当する教育法の内容と教科教育担当教員のかかわる授業での各領域内容の位置づき、学生の各領域に関する学習経験を把握すること。③保育領域に関しては、学校教育教員養成課程の保育学演習との同時期開講になることから、これらの関連性と学習内容の順序性の検討。